

言語とジェンダー研究のフロンティア

井出 里咲子

1. はじめに

本稿は、アメリカにおける「言語とジェンダー¹⁾研究」の最近の研究動向を考察するものである。

言語とジェンダーに関する研究は、社会言語学の分野で、Robin Lakoff²⁾の研究を契機に1970年代から盛んになり、これまでに理論や方法論も様々に変遷を重ねてきた。ここでは最近の研究分野を概観し、かつ示唆的要素に富む文献を3つ取り上げ、簡単な解説を加えながら、言語とジェンダーの関係がこれまでいかに捉えられてきたか、そして今後どのような研究が求められているかを論じていきたい。またこれらをふまえた上で、最近注目されている文化人類学視点から、言語とアイデンティティーの問題を巧みに捉えたエスノグラフィー（民族誌）のアプローチによる研究の一つを紹介することにする。

2. Powerの構造

まず、これまでに言語とジェンダーに関する「理論」が、社会的、学術的背景の中でどのように発達してきたかを総括的に論じたものとして次のものがある。

Todd, A. Dundas & Sue Fisher, 1988. Theories of gender, theories of discourse. In Todd, A, Dundas & Sue Fisher (eds.) Gender and Discourse : The power of talk. Norwood, NJ : Ablex. 1-18.

これは、談話の中にみられるジェンダーに焦点をあてて組まれた特集の「序章」として寄せられた論文である。著者達はこの中で、社会学、言語学、人類学、フェミニズムといった分野のジェンダー理論の発展過程を辿った上で、これからの言語とジェンダー研究の進むべき方向を確認している。

著者達は、研究者が言葉、人、そして文化の研究に携わる場合、社会構造 (social structure)、社会的かかわり合い (social interaction)、そし

て社会的「個」の形成 (socially constructed selves)の関連について考察し、その中で言語が果たす役割を観察するべきだと述べている。ジェンダー研究の際には、「個」の形成の中に、「ジェンダーとしての個」が大きな位置を占めることになり、それがどのような社会構造の中で、いかなるやり取りを通じて形成されていくかをみるが必要になってくる。

こうして言語活動が行なわれるコンテキストを見る際には、構造のように規定されたものでなく、関連要素の「動的」な関係、つまりそこに働く Power を把握することが、その状況を最も確に捉えることにつながる。こうした見方は、社会の中の男性、女性の典型的役割を見出そうとしてきた機能主義的立場、また二項対立的視点を重視した構造主義的ものの見方から脱したものである。観察者の一方的見方で様々な現象を切り取ってしまうことへの反省をふまえ、全ての言語活動をコンテキストごとに異なる相対的なものとして捉える必要性が、ここでは繰り返し主張されている。こうして言語活動のコンテキストの中の Powerのあり方を観察すれば、社会的、文化的に規定されるジェンダー、そして象徴としてのジェンダー習得の過程が見えてくるのであり、また個人や集団がいかに統合され、いかに変革されてゆくかも見えてくるはずなのである。

ここでいう Powerとは、フェミニズム的立場から個人の利得にもとづいて測られるもの、あるいは社会学、経済学的に個人の生産量によって数量化されるような概念ではない。それは場面ごとによって規定されるもので、そこに関わる人たちが何を基準とし、何を求めているかによって生まれるダイナミックな動きそのものを指す³⁾。

こうした Powerの概念の導入を推奨しながら、著者達は言語とジェンダーの理論研究がまだ発達段階にあるということを前提に、これからは全てを統一的に説明する理論の確立に力を注ぐより、新しい考え方を受け入れながら、多くの研究を奨励して行くべきだとして締めくくっている。

3. 「サブカルチャー」としてのジェンダー

Maltz, Daniel & Ruth Broker. 1982. A cultural approach to male-

female miscommunication. In John Gumperz (ed.), Language and Social Identity. Cambridge : Cambridge University Press. 196-216.

この論文は、これまでに数多く発表されてきた、言語とジェンダーに関する談話分析の研究成果をまとめたものである。内容的には男性／女性、また幼児、少年／少女、青年期の男女のことばの使い方の特徴が、具体的かつ体系的にまとめられている。また言語使用の上で男女差が生じる原因についても、エスノグラフィーによる調査に基づいたこれまでの研究結果をもとにした考察がなされている。例えば少女期の女の子は、同年代の同性と比較的小さいグループを組み、協調性を重んじた遊び方をする、といった調査結果をもとに、少女期の行動様式がいかに関言語使用に反映しているかを説明している。

多くの事象を包括的に検討した結果、著者は、ジェンダーという社会的要素は人種、民族、世代等と同様に「サブカルチャー」として扱われるべきであると主張している。社会の中で男女は、それぞれ別々のサブカルチャーに属し、それぞれが規定する文化的ルールに基づいて行動している。そのため男女のコミュニケーションの方法は異なるということが前提としてあるので、男女の会話にミスコミュニケーションが生じるのは当然の結果である。こうした立場は、男女の違いを認識するところを新たな研究の出発点にしたものであり、それまでの、男女の社会的平等権獲得を目的とした風潮とは性質を異にするものである。またこの立場は、以後に続く研究の方向性を象徴する結果となったともいえる。方法論に関しては、これまでの研究を回顧した上で、談話分析が有効であること、また言語調査をする上で、人類学的調査が重要であるという点が挙げられている。

Martz と Broker の論文が社会言語学、コミュニケーション研究の集大成だとすれば、同じ問題をアカデミックなレベルから一般大衆の足元に引きおろし、日常の風景の中のものとして記述、分析したのが、次に挙げる一冊である。

4. ベストセラーとなった男女差研究

Tannen, Deborah. 1990. You Just Don't Understand : Women and men in conversation. New York : William Morrow & Company.

1990年～91年、全米でベストセラーともなったこの本は、アメリカにおいて男女のコミュニケーション問題が、どれほど人々の関心の的であるかを自ら証明し、またそうした関心をますます煽る原因となったものである。この中で Tannen は映画、小説、著者自身の経験、また友人との会話等を資料に、日々の暮らしの中で男女が会話の中ですれ違う模様を描き、その言語使用現象を社会言語学の研究結果と絡ませて分析している。そして、ことばの上で男と女がすれ違う際のメカニズムを巧みに解明し、男女間の摩擦の中で会話のスタイルの差から生じる誤解によるものがいかに多いかを指摘している。異性間のコミュニケーションは誰もが経験することであるため、多くの人が共感した。本書は男女のことばの使い方の仕組みの違いそのものが納得できるように解説されており、会話の中の男女の誤解を防ぐという点で何よりも実用的である。こうしたことから、この本は大衆の高い支持を得て、一時はこのテーマが社会現象とまで化した⁴⁾。

以上、最近のアメリカでの言語とジェンダーの研究の動向を論じたが、次に最近注目されているエスノグラフィーのアプローチによる研究の一例を紹介しよう。

5. アイデンティティーとしての言語を捉えるエスノグラフィー

Eckert, Penelope. 1989. Jocks and Burnouts : Social categories and identity in high school. New York : Teachers College Press.

この本はアメリカ、デトロイト郊外を舞台とした高校生たちのエスノグラフィーである。Eckert は、高校生が自ら Jock(勉強とスポーツに熱心で、学校行事に積極的に参加し、大学進学を希望している集団) と、Burnout(学校に対し、反体制的態度をとり、卒業後は就職を予定している集団) という2つのカテゴリーに分かれているところに注目した。そして高校生たちが学校という社会の中で、それぞれのカテゴリーを基準にして、いかにアイデン

ティティーを確立してゆくかを人類学的な視点で記述している。調査は主に高校での参与観察とインタビューによって行なわれ、Jock と Burnout の休み時間や週末のテリトリー、服装、学校外での交友関係、人生観等、幅広い項目に関して記述がなされた。高校生たちの生まの生活、生き方が浮き彫りにされたこの本は、言語学者、文化人類学者の他にも教育関係者、心理学者、カウンセラーといった人々にも読まれている。また高校生／思春期という誰もが通過する時期を対象としているので、共感するところや、比較できるところが多いのも特徴的である。

Eckertはこの調査をもとにした言語学関連の研究を幾つか発表している。以下に挙げる研究は音韻、談話の研究であるが、どれも緻密なエスノグラフィーの調査に基づいた理論付けがされていて興味深い。

a. 1988 Adolescent social structure and the spread of linguistic change. Language in Society 17. 183-207.

これは、調査地域の母音の発音変化と高校生のアイデンティティーの関係についての研究である。この中では主に Burnoutが地域の労働者階級の人々との交流を通じて、その領域の発音を習得していく過程が描かれ、音韻の習得が社会的ネットワーク、個人のアイデンティティー、そして同年代間の圧力 (peer pressure)にどのように関わっているかが説明されている。

b. 1989 The whole woman : sex and gender differences in variation. Language Variation and Change 1. 245-267.

高校生の男子／女子、Jock/Burnout といったカテゴリーごとの発音の違いを分析し、その原因を彼らの自分自身、また仲間たちに対する意識、受けとめ方と関連させて考察している。

c. 1990 Cooperative competition in adolescent "girl talk". Discourse Processes 13. 91-122.

女子生徒のグループを使って行なわれた談話の分析の調査。女子生徒がいかに、協調しながらも談話の中での主導権を握っていくかを、彼女たちの中の理想のリーダー像、友達にどう見られたいのか、といった意識を背景に説

明している。

6. おわりに

最近のアメリカにおける言語とジェンダーの研究のフロンティアとして、幾つかの論文、調査研究を紹介した。ここで、今後、当分野において重要と思われる理論、方法論上の観点を以下に3点まとめてみたい。

- (1) ジェンダーをサブカルチャーとして認識する必要性。
- (2) 言語活動が行なわれているコンテクストに注目し、その中でいかなる Power(力関係) が働いているのかを把握する必要性。
- (3) 方法論としてのエスノグラフィーのアプローチによる、談話分析の有効性。

こうした観点を足場としながら、これからも多くの示唆的研究の発展が望まれている。西洋的視点に必ずしも縛られることのない日本において、この研究分野の発展に貢献できることは多くあると思われる。

<注>

- 1) ここでは性に関する概念の表示として、「性差」、「男女差」等の代わりに、社会的側面をより重視した「ジェンダー」という用語を用いることにする。
- 2) Lakoff, Robin. 1975. *Language and Woman's Place*. New York : Harper & Row.
- 3) この Powerの概念は Michel Foucault の Power の概念と合い通じるところが多い。
Foucault, Michel. 1972. Power/Knowledge. New York : Pantheon Books.
- 4) 最近では女性だけでなく、男性というジェンダー解明に対する関心も高まっており、例えばテキサス大学文化人類学部内でも1992年 *Masculine studies* の講座が開講された。

(テキサス大学オースチン校文化人類学部)